

編集・発行
 社会福祉法人
 阪神共同福祉会園田苑
 広報
 〒661-0972
 尼崎市小中島 1-1-18
 TEL:06-6493-3731

私たちの目指すもの

- 一、地域に開かれた施設
- 二、入居者、家族、施設、地域のみんで作る福祉を！
- 三、老人と共に生きがいを見い出す生活を！

社会福祉法人阪神共同福祉会園田苑

熊本地震は、2016年4月14日以降に熊本県と大分県で相次いで発生している地震である。(出典：wikipedia)

今号は、園田苑職員による現地報告、募金活動報告、理事長による東日本大震災の支援報告を掲載いたします。



益城町の小学校の校庭。車中泊されているたくさんの車と、土俵の屋根の倒壊の様子。



宿泊定員を超え受け入れている為、廊下にはベッドが並ぶ。

九州の一員として ~微力だけれど無力ではない~

4月14日、1回目の地震が熊本を襲いました。私は結婚を機に3月末で11年働いた園田苑を退職し、旦那さんの転勤で福岡での生活が始まっていました。福岡は震度3。まさかもう一度大きな地震が来るとも思わず、翌日から関西へ用事で戻っていました。

16日朝起きると、本震と呼ばれたマグニチュード7.3の大きな地震のニュース。もうしばらくいるつもりだった予定を切り上げ、17日に福岡へ戻りました。

地震発生から2日目。私たちはこの熊本地震の前に阪神淡路大震災と東北大震災を経験し、震災も3つ目になると関心が少ない気がしていました。悪い意味慣れてしまって、被災された地域以外の、自分も含めたいつも通りの生活に、今の自分に何ができるのかとやきもきしながら、新幹線でいろいろ考えていました。その時、SNSで見つけた福岡市長の取り組み。



『熊本へ入るのは救助隊や自衛隊などの専門家が優先。むやみに今の時点でボランティアに行くのは避けてほしい。それでも九州の一員として、自分達になにかできないかと考えている市民がいる。その気持ちを少しでもアクションにする為に、皆からの支援物資を市としてヘリやトラックで搬送します』

そこには、大きい震災を経験してきた私達だからこそこの取り組みが書かれていました。



- ① 廃校した小学校に支援物資を個人が持参する
- ② 仕分けの手を熊本に煩わせないよう、各教室に自分達で物資を区別して運び入れる
- ③ 持参する物品も熊本から一番必要なものを聞き取り、5品目にしぼる

何かを届けたいと考えるとき、こんなものが必要な、こんなものもあったら便利だろうな、とついろいろなものを詰め込みがちですが、この取り組みを読み、過去の支援から学んだ“被災地の手を煩わせない支援”だなと思いました。

博多駅へついてすぐ旦那さんと物資を購入し廃校へ。そこにはたくさんの方が物資を持参していて、小学校前が渋滞するくらい。皆が同じ気持ちだったのだなと感動しました。

施設長からも連絡を受け、園田苑としての物資もたくさん購入し、運び入れることが出来ました。地震発生後数日間は、毎日のように物資を運びました。

そして地震発生後10日。理事長と秀石さんが熊本へ行くとお知らせを受け、福岡から同行させてもらうことができました。その時一番強く感じたのは、「もう少し早くくるべきだった」ということでした。被災地のニーズは毎日変化し、私たちが行った震災10日目の熊本市は、物資も有り余り、物のはけ方に頭を悩まされているくらいでした。一番被害の大きかった益城町でも水が通り、生活が落ち着きはじめていました。小規模多機能の職員さんに伺うと、物資に困ったのは2日ほど、7日目までは水が出ず、通常業務以上に避難されているお年寄りを介護しながら、水汲みにも行かないといけな。自分たち自身も被災して避難所から通っている職員もいる。休ませてあげたいけど休ませてあげられなかった。。とのことでした。もう少し早く自分が来ていたら。。すごく悔やみました。

物資支援から人的支援へ、被災地の環境が刻一刻と変化している状況が、SNSを通じてでも外部の人間が把握でき実行に移せるのに数日かかってしまう。これからの課題だなと感じています。

たまたま話しかけて下さった避難されている町民の方は、“選べるくらい各地から物を届けてもらった。あとは自分たちの町がどうやって町づくりをし、生活を再建できるか、自分達が頑張る番”とおっしゃっていました。被災地へ入り、熊本の福祉施設、片づけを手伝ったおうち、食事処、行く場所行く場所で「遠い所ありがとう。怪我などされずに帰ってね。」と逆にお気遣いいただきお言葉をいただきました。これからも熊本、大分の為に何ができるのか、微力だけれど無力ではない私達にできることを考えていきたいと思います。(深津 智子)



「被災地を訪ねて」

4月27~29日、地震のあった熊本に中村理事長、元職員の深津さんと行ってきました。

飛行機から熊本が見えた時には、町の3分の1(屋根)がブルーシートに覆われた状態で、現実を目のあたりにした瞬間でした。大変なところに来たのだと、私自身が覚悟した瞬間でもありました。

到着して直ぐ、福祉避難所がある熊本学園大学に入りました。熊本学園大学は熊本市内に位置し、熊本市内周辺の要支援・要介護高齢者、身体障害者が大学の講堂に避難しておられます。当時、市内の福祉サービスは再開しており、避難されている方は、日中はデイ、夜は福祉避難所で過ごすという方が多く、日中の避難所は人が閑散としていました。支援物資は、熊本市内ということもあり行き届いている印象でした。ボランティアとして熊本学園大学に降り立ったものの、大学の学生や全国から多くのボランティアが介入しており、何もすることが無いかもしれない…と思い、深津さんと私は大学を飛び出し、地震の強かった益城町(ましきまち)に体が向かっていました。

益城町は熊本市内から車で30分ほどの距離です。熊本に何のツテも無く、一番大変な時に二人で行っても邪魔になるだけかもしれない。これまで現地に入ったボランティアの情報などを考えて、「家で暮らす高齢者は一体どうなっているんだろう」という思いに至り、益城町で在宅高齢者の支援をしている「小規模多機能居宅介護」を探して向かいました。最初に辿り着いたのが「小規模多機能 あんず」です。



あんずは、福祉避難所ではありませんが、自主的に地域の高齢者を受け入れ、宿泊定員 9 名に対し、16 名の方が泊まっておられました。伺った時、「何か手伝わせてもらえることはないか」と不躰なお願いに対しても快く受け入れてくださいました。「それだったら、今晚から泊まったら」とまで言って下さり、夜勤のお手伝いをしながら、食堂のソファに寝かせてもらいました。地震直後は、避難所から小規模に勤務する職員もいたそうです。事業所で働く介護職員自身が被災しているなか、被災した高齢者の支援もされていることに、本当に頭が下がる思いでした。



翌朝、高齢ご夫婦の家にお邪魔して、家の掃除や入浴介助をさせて頂きました。地震の時の話、知り合いが亡くなったこと、避難所では気を使いオムツで排尿をしていたら、排尿感覚が曖昧になって失禁するようになった等々…。地震から初めてお湯に入れたとも話して下さいました。僅かな時間でしたが、快く私たちを受け入れて下さったこと、この場を借りてお礼申し上げます。有難うございました。

被災地では、家に帰るための支援が急務のようです。家を片付けることが難しい高齢者、その手が行き届かない現状…避難所で進む要介護化（ボランティアの調整に時間がかかるようです）。もう一つの小規模は「小規模多機能 いいの」です。町の山間部に位置し、まだ水が止まっており、井戸水で生活用水をしのいでいるそうです。こちらも、今回の地震で家に帰れなくなった高齢者が居ると話されていました。

益城町には土地が多くあるように思いました。すぐにも仮設住宅を建てられるのでは？と感じたのですが、地盤の問題、個人の田畑であること、仮設住宅を建てるには土地の用途変更など種々の問題が立ちはだかっているそうです。地震から 10 日以上経っているこの段階でも、決まっていないとのことでした。避難所の駐車場、学校の校庭には、隙間がないほどの車が停まり（車中泊）、家に帰れない方が多く居られる現状…。1 日目は小規模多機能あんずのソファ、2 日目は熊本学園大学の講堂に泊まらせて頂いた私ですが、たった 2 日間の雑魚寝でも「体はしんどい」のです。3 日目には嘔吐してしまいました。数日で、この様です。

避難所の皆様の苦痛、本当に大変だろうと思います。何か出来ることがあればと思うのですが、勝手に知らない自分が短期間の支援をしたところで足手まといになるのです。阪神淡路大震災を経験し、仮設住宅の支援、そしてグループハウスを運営してきた園田苑です。この経験を活かせるような、長期的な支援が出来たらと感じた 3 日間でした。



（小規模多機能型居宅介護 園田苑 管理者 秀石 直美）

長期的な支援を視野に ～ここでできることをする～

募金活動は今も継続している。4月14日に地震が発生し、翌週の月曜日18日から1週間（雨の日は中止。4日実施）職員たちに呼びかけて苑前で街頭募金を行った。毎回20名近い職員が参加してくれた。

仕事帰りのサラリーマン、学校帰りの学生たち、家路を急ぎ自転車を走らせる人たち、行き交う車からもそれは届けられた。沢山の皆さんの心が75,714円という金額になった。勿論それ以外にも、利用者、ボランティアや職員から直接いただいた募金などがある。



ある朝、『熊本地震募金募集』と書かれた大きな看板とその横に募金箱を苑庭の道路に近いところに置いてみた。現地の無人の家に泥棒に入ったというニュースが流れていたから、一抹の不安はあった。数人の人からも、「これはどうなん?」「大丈夫?」「持ち逃げされへん?」と指摘された。

持ち逃げされるほど集まらないと言いながらも、箱がなくなったりするのも嫌やなど内心不安で、最初は、数時間置きに見に行った。初日のお昼、箱を持ち上げるとコロコロと音がした。45円が入っていた。それから、必ずと言っていいほど、小銭が入れられていた。「まだまだ人間、捨てたもんじゃない」「ほら、また入ってたよ」「入れてくれる人見ましたよ」と会話が弾んだ。

ある日、5,000円札が入っていて、びっくりして、小躍りして報告した。今も晴れた日には、苑の外に募金箱が置かれている。苑内外の募金箱に募金が途絶えた日がないのは、すごいことだと思いませんか?5月23日現在募金総額489,000円になっている。

このお金を有意義にしっかりと現地に届けること、そして、長期的な支援になることを視野に入れた動きを模索している。



またまた、多くの人と出会えて感動

理事長 中村大蔵

5月9日から14日まで50α回目の東北行きは、陸前高田に嫁いだ娘を津波で喪った藤田さん夫婦と一緒に。同行を申し出たのは昨秋11月、波照間に出会った畑保健師である。今回も出会い多き「旅」となった。

再会した県立高田病院の震災時院長であった石木医師は、津波で最愛の妻を亡くしている。カルテなど記録をはじめ病院の機能全てを失ったところから、被災地での医療活動を再開させ、現在は診療所の医師として活躍している。

「関西へ一度お越しになりませんか」と声をかけると快諾された。今度、会う時は地域、在宅医療の展開について話が弾みそうで楽しみである。

同じ陸前高田で津波に保育所ともども複数の園児をさらわれた、前所長の佐々木さんとは、新築なった保育所で出会った。静かに語る彼女からは、緊急時のとっさの判断と決断力の実際を聞いた。

「りくカフェ」で健康食をいただきながら、旧沢内村の保健師だった千田さんと二度目の出会いをした。「りくカフェ」は、震災後に出来た地域の新しい出会いの場所である。会話をしている中で畑保健師が、突然「沢内村に是非行きたい」と言い出した。急遽「深澤晟雄（まさお）資料館」に向かうも、あいにくの休館日。

だが、千田さんの連絡で当時の村役場の職員だった米沢さん、保健師だった深澤さんが待っていてくれた。この二人は生命尊重の沢内村行政と、それを推進した故深澤村長の足跡を、時が経つのも忘れるほど熱っぽく語る。59歳の短い命を沢内村に捧げた深澤村長の人望を知った。

深澤村政を引き継いだ故太田祖電村長は、現役時代に二度も園田苑に来て講話され、入所者と交流し泊まって帰られた。園田苑と沢内村とは不思議なご縁がある。

宿を取った湯治場旅館で偶然木島さんと出会った。「いのちのおはなし」で全国行脚している、指人形の木島さんとは、たった数分の会話しかできなかった。松本市にお住いの木島さんは、ちょうど11日、陸前高田で「がらくた座、人形劇と紙芝居と語りの会～ちいおぼさんの命のメッセージ～」を開催していた。

一目見るなり素敵なお木島さんに魅せられた。「是非、尼崎へ！」とお誘いするや、「喜んで！」と即答された。

石木さん、佐々木さんは藤田さんの紹介。千田さんは震災の年、大船渡の教会でその名を初めて知った。木島さんには、藤田さんがすでに私のことを紹介していたようである。

離島で長らく地域保健活動に従事していた、畑保健師は間もなく関西に移住してくる。これもまた大いなる楽しみである。

人との出会いはいつも新鮮で感動的！

園田苑からのお知らせ

6月25日（土）音楽演奏会・・・音楽ボランティア「海」によるさまざまな楽器の生演奏会。

園田苑2階食堂にて。観覧自由。14時～15時。

編集後記

ナッツ類を食べるのが流行っているそうです。私の中で。（きりん）

野球部、バイト、勉強。それぞれの立ち位置で頑張ることを見つけようとする我が家の子どもたち。母も負けずに具体的に目標を持って頑張ります。（きんたろう）

最近、思うことがあります。

その一つ、夏に向かい気温は暑くなる一方ですが、気持ちの熱さが少なくなっているように感じています。

熱い気持ちは、忘れずにいたいです。（だるま大使）

接遇研修で、「1個のレンガの使い方」を10挙げなさい」という課題があった。

5つも思い浮かばない。年を取って想像力が低下してきたのか、元々なのか、なんとも切ない結果だった。これから上昇するとも思えない想像力を想像するのが怖い私。

（野の花）